

イヤンヤ洞窟遺跡 (大島郡笠利町土浜)

位置と環境

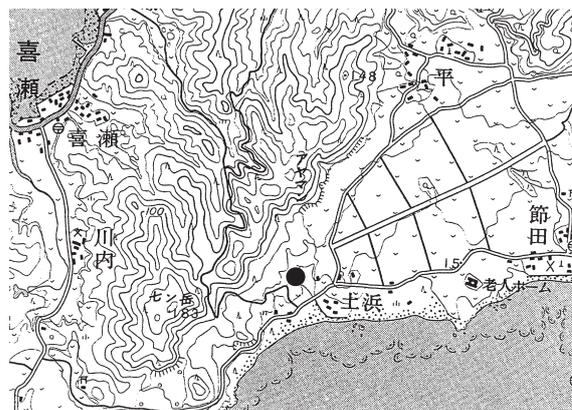
笠利町東海岸，南側に位置し，海岸段丘山手側洞窟にある。笠利町東海岸砂丘地帯は遺跡の宝庫として知られている。

洞窟は西側山手に開口する。北側は東西にのびる谷になっており，東側は台地状になっている。西側開口部分前面は僅かなすり鉢状の低湿地になっており，1975年頃までタイモや稲が栽培されていた。洞窟内部は開口部分が約10m，奥行きが約13mであるが奥にはまだ小さな人が這って通れるぐらいの穴が続いている。天井部分は落盤しており，周囲の石灰岩にアコウの大木やピロウなどが繁り，鬱蒼としている。1975年頃までは洞窟内が風葬墓として利用されており，その名残の人骨などがかなり散乱していた。

調査の経緯

イヤンヤ洞窟遺跡が調査されたのは1933年風葬墓としての人骨調査を三宅宗悦が行っている。1963年(昭和38年)9月には熊本日日新聞社によって南島学術調査団(団長松本雅明)が編成され，永井昌文や三島格が調査を行っている。

1987年に県道工事のため洞窟の北西約200mが発掘調査され，旧石器が出土して話題になった。



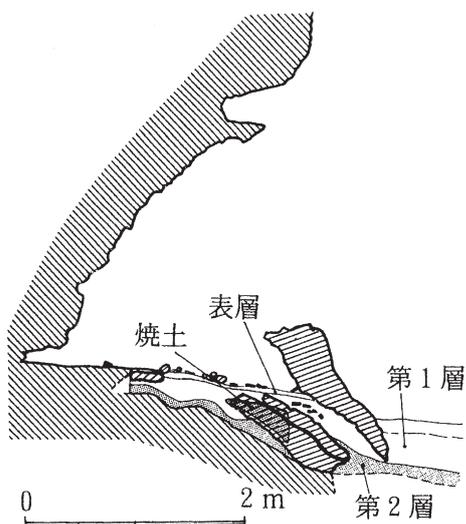
第1図 イヤンヤ洞窟遺跡の位置

遺構と遺物

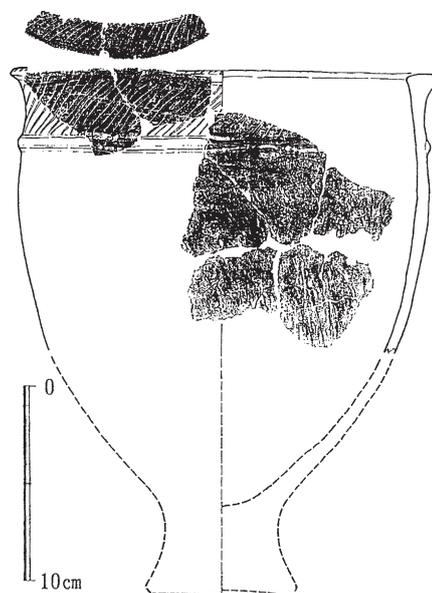
1963年の発掘調査では洞窟の層序は1層と2層に大別されている。

出土遺物はゴホウラ製貝輪，弥生系土器と爪形文土器，条痕文土器などが出土している。発掘当時はゴホウラ製貝輪は2層からの出土となっているが出土遺物全体を考慮し，また発掘当時の報告では天井部分の落下が80年から90年前まではつながっていたとされていることから落盤により部分的に攪乱を受けた事も考えられる。これらのことなどを考え，またこれまでの研究成果から弥生系土器とゴホウラ製貝輪は同一層で条痕文土器，爪形文土器に分けられよう。

弥生系土器は，その特徴から南九州弥生中期前半



第2図 イヤンヤ洞窟遺跡断面略即図



第3図 イヤンヤ洞窟第1層出土土器

の入来式土器に類似する。あやまる遺跡，長浜金久遺跡，サウチ遺跡などからも弥生期の土器が出土しており，奄美においては弥生時代に南九州との交易が行われていたことを伺わすものである。

ゴホウラ製貝輪は復元最大長9.9cm，最大復元幅7.8cmである。1部が破損されている。その形状的特徴から弥生時代前期から中期とされている。

爪形文土器は1層と2層から出土している。1層出土は13点，2層出土は39点を数える。1，2層出土の爪形文土器は文様，胎土，焼成，色調からあまり相違はない。土器は喜子川遺跡出土の1類と2類に相当する。

特徴

奄美，沖縄においては沖縄のヤブチ式土器などと共に貴重な資料のひとつに数えられる。その後沖縄野国貝塚や北谷町伊礼原遺跡，奄美喜子川遺跡，宇宿高又遺跡などからの出土がある。

資料の所在

発掘資料の貝輪は永井昌文が1981年に，土器資料は三島格が1992年にそれぞれ笠利町歴史民俗資料館に寄贈され，保管されている。

「ヤーヤ洞窟遺跡をイヤンヤ洞窟遺跡」としたのはイヤンヤを”岩屋”と方言で呼んでおり，三島格にも確認をした。方言でイヤンヤと発音出来ずにヤーヤと記述したとのことである。

参考文献

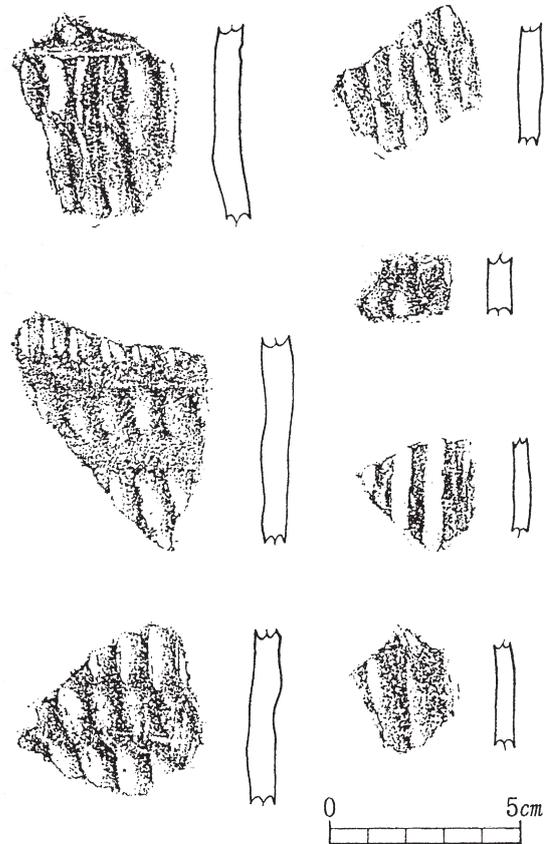
永井昌文・三島格1964「奄美大島土浜ヤーヤ洞窟遺

跡調査概報」『考古学雑誌』第5巻第2号

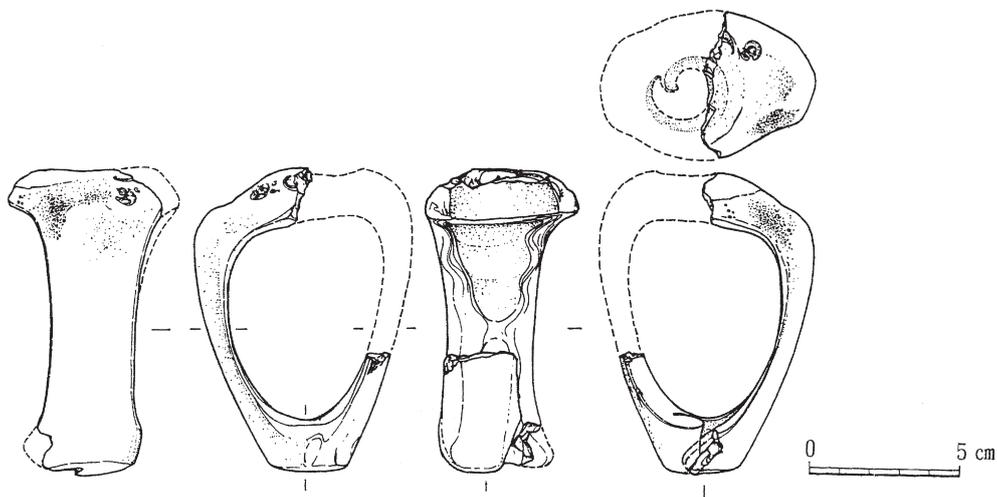
中山清美1992「イヤンヤ洞窟遺跡出土の爪形文土器」『奄美考古』3号

木下尚子1996「イヤンヤ洞窟のゴホウラ貝輪」『奄美考古』4号

(中山清美)



第4図 イヤンヤ洞窟遺跡出土爪形文土器



第5図 イヤンヤ洞窟のゴホウラ貝輪